
小説ゼルダの伝説 呪いの仮面

かく@z1d

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

小説ゼルダの伝説 呪いの仮面

【Nコード】

N1420C

【作者名】

かく@z1d

【あらすじ】

ムジュラの仮面にまつわるお話。ストーリー、設定共にオリジナルです。リンクは大人、ムジュラ本編よりも過去の話。メインはリンクと幸せのお面屋と被害者の少年とムジュラの仮面ですかね。

(前書き)

戦闘描写が輪をかけて下手くそなので誰か教えてください(泣)

ムジユラの仮面。

「これは本当に良いお面だ」

闇の中で、男は仮面を手に取りながら言った。

「これにはたくさんの方の恨み妬み、そして憎しみが詰まっている」
一目見ただけで人をゾツとさせるほど気味の悪い仮面。これをずっと見ていると、何かに取り憑かれそうになる。そんな気持ちがあるのだ。

「手に入れるのに本当に苦労しましたよ。ですが、これほどの気が宿った仮面なら、きつと人をたくさん食べるに違いない」

と、男は闇に語りかけた。

「昔、生け贄にえの習慣がありました。罪もない人が存在しない神々への生け贄とされ、彼らは自分を殺した人間を恨み、憎んで死んでいきました。そして、生け贄にされた人間は決まって生け贄の儀式の際に、この仮面をつけていたそうです。そして、死者の怨念はこの仮面に宿ったのです」

信じなさい、信じなさい、信じなさい……

若者は、草原のただ中に立っていた。

ふう、と、リンクは額の汗を手の甲でぬぐった。太陽の光が頭上から降り注ぐ。

何か当てがあるわけでもなくただ旅を続ける青年。もう、歩き続けてかなりの時間が経っている。いくらリンクが人並みはずれた能力の持ち主であるとしても、疲労には勝てない。

早くどこかで休まないとなあ、と思いリンクは前方を見ると、草原に横たわっている長い長い一本道の先に、村らしきものが見える。あそこへ行こう、とリンクは決めた。もしあれが村の廃墟かなん

かだつたら、俺は神様を恨むぞ！

一陣の風が草原を横切った。良い風だ、とリンクは思った。そして、遙か^{はるか}彼方に見える村に向けて歩き出す。

リンクは各地を一人で旅をしていた。一人旅が辛いわけではない。ただ、時々寂しくなつて仲間が欲しくなるときがある。だが、リンクは決して仲間を自ら求めたりはしない。出会いがある限りいつか別れも来る。その別れの悲しみを、リンクはそれまでの旅で嫌と言うほど味わってきた。

リンクの旅は、旅と言うよりはむしろ冒険に近く、それにはいつも死の影がつきまとつた。だが幸いにまだ彼は死んでいない。

光り輝く聖なる剣を振るつて強敵と戦い、人助けもし、勇者と呼ばれたこともある。だがリンクは勇者などという称号には興味がなかった。自身が特別な力を持っているなら、人のため、特に大事な人の為に戦うのは当然のことだ。

特別な力……そう、それは、選ばれた勇者のみが得られる、本当の意味での特別な力だ。異能とも言える。

彼の左手に刻印されし聖なる力の証 勇気のトライフォース

それが彼に力を与えている。

リンクは歩きながら左手を太陽にかざしてみた。太陽の光に透かされて手の甲のトライフォースが見える……かと思われたが、それは見えなかった。確かにそこに勇気のトライフォースはあるのに、普段それを見ることは出来ない。何かのきっかけでそれが浮かび上がることはあるが、リンク自身、勇気のトライフォースが浮かび上がったのを見たことが数回ほどしかない。

リンクはため息を吐いた。いい加減どこかで落ち着いても良かったが、勇気のトライフォースが自分に宿っている限り、自分の旅は永遠に終わらないだろうと自然に思えてくる。トライフォースは圧倒的な力であると同時に枷^{かせ}でもあることを、リンク自身が感覚的に理解しているのだろう。

考え事をしている内に、かなりの距離を歩いたようだ。もう村は

目に見えて近くなっている。

村はそれほど大きくはなかったが、少なくとも先ほどリンクが危^き惧^くしたように廃墟ではないようだ。

彼は先を急ごうとしたが、出し抜けに横から声がかかった。

「お兄ちゃん、この先の村に用があるの？」

彼はぎよつとして声の方に振り向くと、一人の少年と若い女性が一人いた。ぎよつとなったのは旅慣れた彼が、疲れていて考え事をしていたとはいえ、その気配にまったく気づかなかったからだ。そして、声をかけたと思われる少年の容貌。

その少年の顔は、奇怪な意匠^{いしよう}の仮面によって覆われていた。その仮面は目だけが異常に巨大な毒々しい紫色の鬼の顔のような、それとも何か全く別の怪物を模ったような形をしている。一見滑稽^{こっけい}なように、その実、ひどく禍々しい印象を受けた。

リンクが言葉を無くしていると、少年は、

「あ、これね」

と言って仮面を外した。仮面を外した少年は、どこにでもいそうな普通の少年だ。ただ、金髪と青い瞳だけはリンクにそっくりだったが。

「お兄ちゃん、この先の村に行くんでしょう？僕そこに住んでるんだ」

「ああ」

リンクは短くそう答えたが、彼は仮面から目を離せずにいた。見た瞬間の強烈な印象が頭にこびり付いていたからだ。

そのため、リンクがそう答えるのを聞いて女性が嫌そうな顔をしたが、リンクが気づくことはなかった。

「僕、これから村に帰るところなの。最後の日だから。一緒に行こうよ」

行き先が同じなのはわかったが、最後の日、とはどういう意味だろうか。少年は無邪気そうに笑っていたが、その言葉にリンクは不吉な予感がした。

「では私がご案内します……と言っても、もうすぐそこなんです」
少年の言葉に割り込むように、女性の方が言った。不自然な間だった。まるで何かを隠しているかのような……リンクは、二人に興味を持った。そしてもともとその気ではあったのだが、当然村に寄る気にもなったわけだ。

「よろしく願います」

リンクは丁寧に行った。そして、三人で歩き出す。

道中、リンクは少年に聞いた。

「君、名前は？」

「僕？僕はソルって言うんだ。女の方はルシア。お兄ちゃんは？」

あの女性はソルの親というわけではないようだ。確かに、母親にしては年齢が若い。一瞬眉をひそめたリンクに、ソルは笑いかけた。少年の無邪気そうに笑う顔をまともに見たリンクは、最初は気づかなかったが、その笑顔の中に影のようなものを見たような気がした。

あの仮面といい、このソルやルシアの様子といい、何かが怪しい。調べてみる必要があるそうだ。

「俺の名前はリンクだ」

「リンクって、それにしても変な格好をしているね。旅芸人か何かなの？」

リンクは苦笑する他なかった。

リンク達が村に入ったとき、丁度日が傾き始めていた。

外から見たとおり、それほど大きくもない村だ。だが、村の規模が小さいにもかかわらずそこに建つ建物は、全て堅牢そうで巨大な外観をしていた。まるで、何かから身を守るために建てたかのよう……リンクは少しこの村に違和感を感じた。

「お前は村長さんのところへお行き」

ルシアがソルに言った。何か用でもあるのだろうか、少し突き放

すような口調なのが気になった。

「それなら俺も一緒に行きますよ。いろいろと聞きたいこともありますし」

そう言って、リンクはソルの頭に手を置いたが、ルシアが慌てたように口を挟んだ。

「え、いや、リンクさんは私が先に宿に案内します。村長に会うのは明日でもいいでしょう。今日は旅の疲れを癒してくださいな」

今のルシアの慌てようといい、不自然な村の様子といい、ソルの持っていた仮面を見たときの強烈な印象といい、引つかかることが多すぎる。

もちろんリンクはルシアの申し出を断ることも出来たが、あえてそうすることもなかった。

ともかく仮面を手にした少年、ソルは村の奥へと行ってしまい、「私たちも行きましょう」

とルシアが言ったので、リンクは村の宿泊施設へと案内されることになった。

旅をしているとよくあることなのだが、このような小規模の村では旅人が何の遠慮もなく泊まれるような宿はないと言っている。そして大抵、そういった村では突然の旅行者は歓迎されない。

案の定、道で出会う村人はリンクの姿を見ても無関心を装うか、珍しいものを見るような目つきでジロジロと観察するか露骨に嫌そうな顔をした。

もちろんリンクはそういったことにも慣れていたので今更気にするようなこともなかった。

そして予想通り、案内された宿は、宿と言うよりは少し大きめの民家といった感じだった。とはいえ、この村はもともと建物一つ一つが大きいので、宿そのものの見栄えは悪くはなかったが。

「へえ、この人も旅人さんかい」

「はあ」

この人も、というのが少し気になった。この村に、自分以外に旅

人が来ているということだろうか。

ともかく、玄関で宿の管理者……というより家主に話を付けて、リンクは宿の中に入った。そこでルシアとも別れる。

宿の天井は高く、一見外から見た分には二階建てのようだったが、どうやら事実には天井の高い一階建てのようだった。

リンクは中を歩いてみたが、留守ではあったが既に客が一人泊まっているようだった。泊まっているのはおそらく、主人が話していたもう一人の旅人なのだろう。リンクはその旅人と話してみたくはなかったが、相手が留守なのではしょうがない。

仕方なく、リンクは自分に割り当てられた部屋に入った。

少しくつろいだらまた外へ出ようと思っていたリンクだったが、さすがに長旅に疲れたのか、リンクの意識はベッドに寝転がってまもなく夢の世界に落ちた。

結局ぐっすりと眠ってしまったリンクは、次の日の朝、起きるとすぐに部屋を出た。

外に出る前に、昨日留守だった客の部屋に寄ってみたが、今日もまだ留守だった。本当にずっと留守かもしれないし、リンクが昨日寝た後に帰ってきてその後リンクが起きる前に出かけたという可能性もある。

「朝食を食べていきますか」

と、宿の主人が勧めてきたので、リンクは食べてから出かけることにした。

朝食を食べ終わりリンクが外へ出て行くと、ルシアが歩いているのが最初に目に付いた。

「おはようございます」

「おはよう……」

挨拶は交わしたものの、ルシアはあまり話したくなさそうな顔をしている。リンクは用件だけ言って早く話を切り上げた方がよさそ

うだなと思った。

「今日は村長さんに会おうと思っていました。あと、ソルは今どうしているんですか」

何がいけなかったのか、ルシアはギクリとしたように一瞬固まった。

「そうですか」

と、ルシアは素っ気なく言って逃げるように去っていった。彼女を捕まえて問いただすことも出来たが、リンクは呆然と立ちつくして彼女が去っていくのを眺めていた。

あのルシアの態度……もしかしたら、ソルになにかあったのかもしれない、とリンクは思った。ルシアは、ソルのことを話したくなかったから無視したのではないか。

嫌な予感がした。

他の村人にも話を聞こうとリンクが村の中を早足で歩いていると、彼はソルと同じ年代の子供達が村の広場のようなところで遊んでいるのを見つけた。

子供同士、彼らならソルのことを当然知っているはずだ。リンクは聞いてみた。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけどいいかな」

「なあに、お兄ちゃん」

快活そうな少女が笑顔で答えた。

「あのさ、ソルって子供のこと知らないかい」

と、リンクが言った途端、彼女の顔から笑みが消えた。彼女の周りの子供達も、顔を背けたり無表情になったりしている。ものすごい変化だ。

「知らない……っていうか、そんな子供この村にいないと思うよ」

「……わかった」

と、リンクはそれだけ答えて子供達に背を向けた。笑みを消した少女の顔を見た瞬間にだいたい返答は予想は出来ていた。

この村で起こっていることの一端を、リンクは少し理解した気が

した。

今、この村で、ソルという少年は存在していないことにされている。昨日から今日にかけて、何かが起こったのは確かだった。

念のために他の村人にも同じことを聞いたが、皆反応は同じだった。

明らかに存在する、この村の異常。

もしソルの母親がいたら会うべきなのだろうが、いたとしても村人は絶対に居場所を話さないだろう。

それよりも村長に会って直接問いただすべきだ。リンクはそう思い、こんな時にでも脳天気な晴れ渡っている空を一睨みして、また歩き出した。

この村を訪れていたもう一人の旅人 幸せのお面屋は、暖炉のある薄暗い部屋の中で村長と話していた。

話ながら、お面屋は家の中を観察した。村長の家という割には小さく、村人から反感を買うこともなさそうだ。それは村長があまり贅沢を好まないせいだろう。

お面屋は苦笑した。まあ、今この村は贅沢をしている場合ではないのだが。

「本題ですが、この村に伝わる生け贄の仮面 ムジユラの仮面を譲っていたきたい」

もう無駄話をするつもりはないと、お面屋は机の上で組んだ手の上にあごを乗せて言った。

彼にはどうしてもムジユラの仮面を手に入れる必要があったのだ。「ですが、この地を蝕む怪物ほしむをどうすることも出来ない以上、我々は今まで通り生け贄によって村を守っていく他ないのです。ですから、生け贄に使う呪物であるムジユラの仮面をおいそれと譲ることは出来ません」

村長の言葉に、お面屋はふうとため息を吐いた。

「生け贄など、今の時代には割に合わないものです。どんな怪物が現れようと、それを倒すことは出来ます」

「そうでしょうか。アレは、罪もない村人が村を恨んで死んでいった結果に生まれた『実在しないはず』の祟り神たまたです。大昔、存在しない神のために生け贄など行ってきたために、生け贄にされた死者の怨念がそれを実在のものにしてしまった。もちろん最初は我々もアレを退治しようとは何度も戦いを挑みましたが、それは無駄なあがきだとすぐに気が付きました。私たちでは、あの貪欲な怪物を倒すことなど到底出来ません。逃げようにも、私たちは怨念の呪いによってこの地に縛られています。だから、アレがそう望むように、我々もあの怪物の食い物にされなければなりません」

淡々と村長は語った。彼は決して無責任な男ではなかったが、他に方法が見つからなかったのだろう。生け贄は怪物が自ら選ぶ。いつ自分がその対象にされるか分からないのに、よくこの村人は気も触れずに生活していけるものだ、とお面屋は思った。今もこの地に縛られながら生活している彼らは、もうとっくに自分の運命を受け入れて諦めているのかもしれない。そして、

「そして、生け贄にされた者のことは忘れるように。そう村で決めているでしょう」

と、お面屋が聞くと村長は黙って頷いた。そして彼はそのまま俯うつむいてしまった。

お面屋は口元をニヤリと歪めて言った。

「諦めるのはまだ早いですよ。実は、神の力を得た最強の剣士が私の知り合いにいます。そして、彼は今この村にいます。彼ならきっと、その怪物を倒してくれるはずです。彼に頼みなさい。彼はきっとこの村を救ってくれます」

信じなさい、信じなさい、信じなさい。

最初、村長は信じられないとも言つように俯いたまま首を横に振っていたが、お面屋の言い方があまりにも真剣なので、顔を上げて言った。

「その剣士に会わせてもらえませんか」

「心配しなくても、もうすぐ彼は自分からここに来るでしょう。聖剣マスターソードを持った時の勇者が……」

リンクが玄関の前に立つと、まるでそこであらかじめ待ちかまえていたかのように、一人の男が出てきた。猫のような瞳に、横に長く裂けた口。男は紫色の衣を纏まとっており、リンクと同じく村の者ではないことは一目でわかった。おそらく宿をずっと留守にしていた旅人だろう、とリンクは思った。

それにしても、異様な気配を持つ男だ。まるで魔術師か何かのような。しかし、男は杖も持っていないしローブも着ていない。

その男 幸せのお面屋が言った一言はリンクをいきなり絶句させた。

「待っていましたよ。時の勇者リンク」

リンクは目を見開いたままお面屋を見つめた。リンクが時の勇者と呼ばれる存在であることを知っている人物は、王女ゼルダを始めほんの一握りしかない。それを何故この男は知っているのだろうか。それに、この男はリンクを待っていたと言っていた。

何にせよ、油断は出来ない。

「あんた、何者だ。ウィザードか」

聞くと、幸せのお面屋は微笑んだ。お面屋がリンクの敵となる人物かどうかは分からないが、その笑いは決して好感の持てるものではない。リンクは顔をしかめた。

「私は幸せのお面屋といいます。決してウィザードなんかではありませんよ」

不気味な男だ、とリンクは幸せのお面屋を睨み付けた。

「待っていた、とはどういうことだ」

あけすけに敵意の込められたリンクの言葉だったが、お面屋は気にせず微笑んだ。どこか人をぞつとさせる笑いだ。

「あなたも気づいているでしょう、この村の異常に。そのことで、中にいる村長が助けを求めているということですよ」

「詳しく話せ。それでは意味が分からない」

もはやリンクは背中中の剣をいつでも抜けるように身構えていた。

この男と話していると、その異様な気配に飲み込まれそうになる。

リンクは冷や汗すらかいていた。

「村は今、とある怪物に襲われています。その怪物は強く、生け贄を欲する祟り神であるため、村の人間は怪物に従うしかないというのが現状です。最初はこんな怪物は存在していなかったのですが、この村には昔から生け贄の習慣がありました。その生け贄の儀式の為に犠牲になった人々の怨念が、その架空の神を實在のものにしてしまったというわけです」

少しばかり嘲笑するような意味合いを込めて、お面屋は説明した。

「そして村が助かるには貴方の力が必要です。このままでは、あのソルという少年も怪物に飲み込まれてしまう」

ソルの名前を聞くと、リンクの表情が一変した。

「まさか……ソルが次の生け贄なのか」

「そうです。村の決まりで、村人達は彼のことを忘れたように振る舞っていました。今すぐ彼のところへ向かって怪物を倒さなければなりません。彼の居場所は村長が知っているはずですよ。もう話はつけてありますので、すぐに彼の居場所を教えてください」

と、幸せのお面屋はお辞儀をして横へどいた。

リンクが脇目もふらずに家の中に入っていくのを確認すると、お面屋は再び微笑んだ。

「さてと……私は先回りをさせてもらって、結末を見守ることにしましょうか」

怪物を倒すため、村に入ってきたときと逆の方向へリンクは走っていた。それには怪物を倒して村を救うという大義ももちろんあった。

だが、それ以上に彼はソルを助けたかった。

会ってからまだ少ししか話していない。ほとんど他人も同然の少年のことをこれ程までに考えてしまうのは、考えてみればおかしな話ではあった。だが現実にはリンクは、何よりも少年の無事を祈って走っているのだ。

走るリンクに勢いよく風が当たり、彼の緑衣をなびかせる。

村長の話によれば、怪物は村はずれの洞窟の奥にいて、ソルをそこへ向かわせたらしい。リンクはそう言う村長の顔を思い切りぶん殴ってやるうかと思っただが、止めた。ソルの居場所について話す村長の顔と口調は、ソルのことを心から哀れんでいるように思えたからだ。

リンクは意識していなかったが、彼とソルはよく似ているのかもしれなかった。見た目もそうだが、お互い、自分の居場所を残酷な運命によって奪われ、孤独を背負い込んでいる。リンクは勇者として、ソルは怪物のエサとして、だ。

走りながらリンクは思った。絶対助けてやるから。生きて帰ってきて、そして幸せになればいい。孤独な剣士であるリンクであるからこそ、ソルには普通の生活をして幸せになつて欲しいと思えた。

村の中を疾走していると、周りの風景がみるみる変化していくのがわかる。家は村の外側に行くほど少なくなつていくが、距離に比例して頑丈そうな建物が多くなつてくる。壁はより厚く、より堅くやはり、怪物から身を守ろうとする村人の意思がそこにはみてとれた。

だが、そんな城塞のような村の風景も唐突に途絶えた。村を抜けると、そこには再び草原が広がるばかりだった。

そしてその草原の中に存在する違和感。

地面に人が一人余裕で入れるくらいの大きさの穴が開いているのだ。それが村長の言っていた洞窟なのだろう。

近づいていくと、穴の中に下へと続く階段が見えた。洞窟というより、地下室への入り口に見える。

この先に、ソルがいるのだろうか。
リンクは足を踏み出して、大昔の死者が生み出した怪物のいる洞窟の中へと入っていった。

地下へと続く階段を最後まで下りると、何のためにそんなものを造ったのか、そこには巨大な地下道があった。地下道はあまりに大きく、奥まで見ることが出来ない。

と、リンクは気づいた。ここは地下であるにもかかわらず、壁の色が赤と分かるくらいに明るいのだ。壁そのものが光っているように見える。奥の方まで、全ての壁が光っていた。そのおかげで、地下でも視界は失われない。

「魔法……か」

それにしても、と歩きながらリンクは思った。これほど大きな地下道全てに及ぶほどの規模を誇る魔法をかけるなど、並の魔法使いの仕業ではない。いや、それは既に現代の魔法の技術では不可能な領域にあった。

リンクは、地底に存在する魔法都市の噂を知っていた。もしかしたら、この地下道も魔法都市の存在を示す証拠の一端なのかもしれない。

周りの光景に目を奪われながらリンクは歩いてしたが、不意に背中に視線を感じて、背中の剣に手をやりながらそれと向き合った。

「ソル……」

リンクの振り向いた先に、ソルがいた。だがその姿を見たリンクは安心するどころか一瞬ぞっとした。

そこに立っているソルの顔には、あの仮面が被されていたのだ。リンクには、その仮面の顔が一瞬ニヤリと笑ったように見えた。彼は冷や汗をかいていた。そして、気づく。

彼自身、どこかムジュラの仮面に恐れを抱いているということに。リンクはそんな自分に鞭むちを打って言った。

「ソル、お前なのか。生きてたのか」

少年は答えなかった。

彼は横に飛んだが冷気の全てを避けきれぬわけもなく、左足を刃のような冷気に切り裂かれた。リンクはしゃがみ込んで足に手を当てた。

ソルを攻撃出来ないのは分かっているが、このまま逃げているだけでは状況は悪化していく一方だ。どうにかしてこの窮地きゅうちを乗り切らなければ、命はない。せめて、ソルの動きを止められれば。

だが、少年は容赦なく次の攻撃を加えようと再び手を頭上に掲げた。その手に冷気が再度宿った。

少年の被っている仮面　ムジュラの仮面が、ニタニタ笑いを浮かべてるように見える。仮面に意思があるかのように。

「そうか……あれが本体なのか」

リンクは気づいた。

死者の怨念が怪物になったと村人は言っていたが、それは間違いだったのだ。本当は、怨念は怪物になつたわけではなく、儀式に使われる仮面そのものに宿った。仮面は、それを被った者の魂を奪っていき、さらに成長する。

全ては、ムジュラの仮面の邪悪な意思だったのだ。

そう分かれば、あれを倒すことは簡単だ。ソルの魂を乗っ取つたあの仮面を取り去って破壊すればいい。

これで、ソルの仇を討てる。

「覚悟しろよ」

リンクは小さく呟いた。マスターソードが輝きを増す。悪を切り裂く聖なる光だ。立ち上がってそれを構えた。

ソル　いや、ムジュラの仮面は声にならない声で咆哮し、冷気の刃を投げつけた。

リンクが光り輝く剣を横に薙なぐと、剣は光の帯を纏って、飛んでくる冷気を全てなぎ払った。後には、剣の軌道に沿った輝く光の残像だけが残った。

「この剣は、お前のような邪悪な存在を浄化するために造られた」
ムジュラの仮面に向かって走りつつリンクは言った。

「キサマ……」

油の切れた機械のような音だったが、それは声だった。目の前の剣士に恐れを抱いた声。

少年は冷気を立て続けに二度、三度とリンクにぶつけたが、全て光り輝く剣に払われた。

「お前は、あまりにも人を殺しすぎた」

気合いの声と共にリンクは跳躍した。そして、宙を浮いている少年と同じ高さまで上がり、叫んだ。

「これで、終わりだ」

右下から振り上げられた剣が、少年の顔からムジュラの仮面をはじきとばした。仮面の外れた少年の顔は、どこか幸せそうに微笑んでいた。

閉ざされた空間の中で、女性は泣いていた。

自分の力ではどうすることも出来ないと分かってはいたが、自分の愛する息子を見殺しにしたという事実は、彼女には到底耐えられるものではなかった。

いや、と彼女は思った。どうすることも出来ない、なんてことはなかったはずだ。本当に自分に息子を助ける気があったなら、とっくに村から逃げていただろう。

そうしなかったのは、祟り神と言われる怪物の呪いが怖かったから。自分が本当に息子を愛していたわけではなかったから。

結局、彼女は母親としてではなく、村人の一人として行動してしまった。すさまじい後悔が彼女を襲うが、もう手遅れだ。

「ごめんね……」

涙が一気に溢れ出す。今更謝ってもどうにもならないというのに。それでも、口に出さずにはいられないのだ。

「ごめんね……」

そうやって、彼女は無限の責め苦に遭う。

「まだ諦めるのは早いですよ」

周囲に誰もいないはずなのに、何故か声が聞こえた。直接頭に響くような声だ。

「今、一人の勇者が息子さんを救う為に戦っています。怪物を倒せるかどうかは勇者の力量次第ですが、少年が助かるかどうかは貴方次第ですよ」

今の声は幻聴かしら。私、とうとう頭までおかしくなっちゃったみたい。

「息子さんは怪物に憑依ひょういされてしまいましたが、幸いまだ手遅れではありません。祈りなさい。祈りは魔法です。どんなものよりも強力なね。だから、ソルの無事を祈りなさい。祈りなさい。祈りなさい……」

でも、またソルの名前を聞くとは思わなかったわ。

そして、彼女はいすに座ったまま手を組んで、頭を垂たれて祈り始めたのだった。

ソルが無事に帰ってくるように、と。

リンクは、抱えていたソルを地面に下ろした。

ソルの顔はあまりに安らかそうで、それはとても生きている人間のものだとは思えなかった。

ムジユラの仮面に操られていたから仮面を外せば元に戻ると思っていたが、どうやらそれは違ったようだ。

一応脈を取ってみたが、やはり。

ソルの命は、とっくに邪悪な仮面に吸い尽くされてしまっていたのだ。

リンクはがっくりと項垂たなひれていた。今はとても動く気にならない。ソルと二人、無限のような時間が過ぎていく。

”ソルが無事に帰ってきますように”

何かが聞こえた気がした。心の中に直接響く音だ。

”ドクン”

続いて、心臓の鼓動のような音が聞こえた気がして、リンクは顔を上げた。

もう一度、ソルの首に手を当ててみる。

しかし、何の反応もない。リンクは「やっぱり駄目か……」と思っただが、

”ドクン”

次の瞬間、はっきりと手に伝わってきた。命の鼓動が。

”ドクン、ドクン”

最初はゆっくりと、しかしだんだん早く。まるで、ソルに誰かが回復魔法をかけているかのようなようだった。しかし、どんな魔法も死者を甦られることなど出来ない。

”ドクン、ドクン、ドクン”

そして、ソルが、ゆっくりと目を開けた。代わりに、リンクの目からは涙がこぼれ落ちた。

リンクはあまりに嬉しくて、彼はそこからムジュラの仮面がなくなっていることにどうしても気づけなかった。

「これで一件落着でしょう」

と、幸せのお面屋は暗がりの中を歩きながら言った。その手には、あのムジュラの仮面が握られていた。

「それにしても、人間の怨念というものは本当に恐ろしい。その怨念は、こんな仮面に姿を変えてなお、この世に留まり続ける」

お面屋は愛しい者を見る目つきで仮面を眺めていた。

「この仮面はこの世に存在する限り、これからもずっと人を喰い続けていくでしょう。でも、それでいい。そうやって悲劇が起こるからこそ、伝説が創られるのですから」

くすくすとお面屋は笑い、

「そう、伝説」

と言った。

「時が満ちるまで、この仮面は私が預かっておきましょう。次にこの仮面が人を喰らうとき、果たしてどんな伝説が創られるのでしょうか」

信じなさい、信じなさい、信じなさい……

(後書き)

長さを丁度良くしようとしたため結構削ってしまった部分があります。

長編でもっと書けば良かったと後悔。

この名作を僕なんか勝手にいじくったりしてすみませんでした…

…

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1420c/>

小説ゼルダの伝説 呪いの仮面

2009年3月24日09時19分発行